

日本文化を探る—漢字・漢詩を通して考えよう

—附属中学校と大学との連携—

大栗 真佐美

(京都教育大学附属桃山中学校)

Search for Japanese culture-Through KANJI and Chinese Classics Poem
—Cooperation of “Kyoto University of Education” and its accessory Junior High School —

Masami OGURI

2018年11月30日受理

抄録：本論文は、本校独自の総合的な学習「MET」において、「日本文化を探る—漢字・漢詩を通して考えよう」というコースを開設し、大学との連携を軸に授業構成した授業案の考察である。

本校では総合的な学習を「MET」「ION」「共通必修」の3つで構成し、その中でも「MET」は「総合的な学習」の中心をなす教育活動となっている。「MET」では、生徒が興味・関心のあるコースを自ら選択、2, 3年生の学年卒をはずし、さまざまな人と関わりながら、主体的に課題解決型の学習を展開している。正式名称は「Momoyama Explorers' Time」、生徒たちが「学びの開拓者」として、「新しい形の学び」に取り組むことを期待している。

この「MET」の時間にテーマを国際理解とし、「日本語はいつから今のような言葉になったのか」と日本語のルーツをさぐり、大陸（中国）との文化交流について考え、「日本語として書いている漢字」が日本語に取り入れられてきた過程等を調べ、実際に漢詩を創作することなどを通して、日本文化とは何かを探求していくことをコース内容とした。「日本語」を出発点にして日本文化の調査をしていくことで、他教科である国語への興味関心も持たせていき、また、大学と附属の連携の中で授業を構築していこうという試みである。

キーワード：日本語、漢文、漢詩、附属学校と大学の連携

I. はじめに

昨年度は大学院で一年間研修の機会を得て、研究課題を漢文教育として学んでいるとき、中・高校生は漢字、漢文や漢詩に対する苦手意識があるという言葉や、論文の中でいくつか目にし危機感を覚えた。

そこで、今回の「MET」コースでは日本文化を探求させ、特に漢字が日本に伝わってからのように日本人に受容されていき、その過程で漢詩を日本人がどのように詠んでいたのかを体験させたいと考えた。

平成29年告示の学習指導要領では第4章「総合的な学習の時間」、「第2各学校において定める目標及び内容の3（2）各学校において定める目標及び内容については、他教科等の目標及び内容との違いに留意しつつ、他教科で目指す資質能力との関連を重視すること」とある。本校のコース開設のテーマは以下の4つ、①国際理解、②環境、③生き方、④健康・福祉であり、国を超えて受け継がれた文化を考えさせたいということから、①国際理解、コース名を「日本文化を探る—漢字・漢詩を通して」とした。

授業の中で「日本語はもともと存在したか」という問いを投げかけたところ、クラスの生徒が「日本語はもともと存在した。平仮名や片仮名があるから。」と答えた。その答えに賛成の人はいるかと挙手させたところ、驚いたことに約半数が手を挙げたのである。普段使い慣れている日本語ではあるがその由来については国語の授業などでしか深く学ぶことはない。『中学書写一・二・三年』¹では、コラム「文字の歴史を探る」において私た

ちが今使っている文字は、いつ、どのようにして生まれたのだろうかという問いがあり、三千年以上前に漢字が生まれ、時代とともに書体に変化したことや、さらに漢字を元にして日本独自の文字である平仮名や片仮名が生まれたことも記載されている。また、小学校六年でも「言葉 日本で使う文字」¹¹や五年「和語・漢語・外来語」でも日本で使う言葉について学ぶことになっている。

しかし、元々の日本語とは何かについて時間をかけて授業を展開しない限り、日本語の由来を知ることはおろそかになり、ひいては日本文学の根本をなす漢文に対しての理解ができないのである。日本の古典文学の中には、漢籍をもとにして書かれているものが数多くある。日本語を遡れば、漢字に辿り着くのである。

日本語のルーツをさぐり、大陸（中国）とのさまざまな文化交流について考え、「日本語として書いている漢字」が日本語に取り入れられてきた過程を調べ、実際に漢詩を作るなどを通して、日本文化とは何かを探求していくことで、中学生が先哲の学んできた漢字や漢詩についての理解を深め、大切さを発信して欲しいと願い、「日本語」を出発点にして日本文化の探究をしていくことを目指した。

(1) 本研究のねらいと方法

本研究のねらいは、生徒たち自身が日本語のルーツを探ることで日本文化とは何かを考察し、ひいては他教科国語での漢字や漢文の学びにつなげることである。

方法として、以下の4つを柱とする。

- ① 京都教育大学の国文学科の先生方と連携し、専門的に学習を進める。
- ② 日本に一番初めに伝わった言葉とされる『千字文』を読み、筆写しながら時を超えて漢字に触れること。
- ③ 漢字ミュージアムなどの見学を通して、漢字から平仮名、カタカナへの変遷を確認する。
- ④ グループで探究したい事柄を決めて、深く学ぶ。

(2) 対象

2年生4人、3年生12人

(3) 生徒の現状と課題

生徒たちは、「LINE」や「インスタグラム」世代で、画面に平仮名でさえ打てば、その文脈に合う漢字が勝手に選択されてでてくるのが当たり前だと思っているようだ。漢字が苦手であるという生徒は年々多くなってきているように感じる。

漢字・漢詩という、普段の日常生活の中で自ら望まなければ深く触れることのないものに、少し不安を持っているようであった。そのため、授業の内容を生徒が納得できるものにしていくため、京都教育大学国文学科の先生方との連携によって授業を展開することとした。

Ⅲ. 実践の概要

1. 授業の構成

全部で11日間（5/6時間目）、（※全体発表リハーサル、全体発表会、まとめ等は別日）の構成を記す。

日時	内容	講師	書写・訪問先
① 9月5日水	世界の言語はいくつある？＋日本人のルーツ		千字文①
② 9月12日水	日本語について①＋プレゼンの技		千字文②
③ 9月19日水	漢字ミュージアム	京都大学名誉教授 阿辻哲次先生	漢字ミュージアム
④ 9月26日水	「日本語の歴史を知ろう」	京都教育大学国文学科 准教授 中俣尚己先生	千字文③
⑤ 10月3日水	上代日本語・中古日本語		千字文④

⑥	10月10日水	中世日本語・近代日本語		千字文⑤
⑦	10月31日水	「漢字・漢詩について①」	京都教育大学国文学科 教授 谷口匡先生	大学
⑧	11月7日水	「漢字・漢詩について②」	京都教育大学国文学科 教授 谷口匡先生	大学
⑨	11月20日水	漢詩について 明治時代		千字文⑥
⑩	12月5日水	MET①～⑨のまとめ		千字文⑦ 仕上げ
⑪	12月11日火	班内発表		
⑫	12月19日水	全体リハーサル		
⑬	12月20日木	全体発表会		
⑭	12月21日金	まとめ (A3) で作成する。		

1. 授業の内容 (継続して行うもの)

(1) 千字文

授業の中で帯の時間を作り、「千字文」を筆ペンで書き、現代語訳に触れるという体験を行うこととした。目的は日本に漢字が伝わったときはどのような漢字が伝わったのかを知るためである。千字文とは中国、梁の武帝（在位502～549）の命により、1000の漢字を四字句からなる韻文に編んだもので、六朝時代の周興嗣撰とされる。6世紀から20世紀の初めに至るまで、漢字の教科書、習字の手本として広く用いられている。『古事記』には応神天皇16年に百済の王仁が『論語』と『千字文』を献上したと記されている。

千字文についての感想は以下の通りである。

・千字文の歴史を知っておどろいた。・千字文の漢字を書くのが楽しみになってきた。などであった。

継続して、筆ペンで漢字を書くことで漢字について少しずつ興味が出てきているようである。

(2) 日本語の歴史など

①から③まで、生徒に課題を渡して、パソコンや書籍で調べるように促した。生徒は世界の言語がどのように分類されているのか、日本語がどこに属するのかを各グループで調査した。また、日本人のルーツについては、人がどのように日本に住むことになったのかDVD等を視聴させ、生徒の興味関心を引くようにした。

下記に記す、大学との連携で話された内容や漢字ミュージアムでの気づきから、各班がこれはなぜだろうか、知りたいという意欲が生まれるように仕掛けをした。毎回、レポートを書くように指導した。

2. 大学との連携1: ④「日本語の歴史を知ろう！」

前編「奈良時代の日本語の音声」、後編「日本語の文字の歴史を知ろう！」

1 日時 9月26日(水)

・5時間目 (13:40～14:30) 前編「奈良時代の日本語の音声」

・6時間目 (14:40～15:30) 後編「日本語の文字の歴史を知ろう！」

2 場所 2年4組教室

3 講師 本学国文学科(日本語学) 中俣 尚己

4 内容 日本語の歴史について知り、今後の調査にいかそう。「中俣先生作成の配布資料あり」

5 指導案 (目標:日本語の歴史について理解しよう) 本時の展開

	生徒の学習活動	指導者の支援および留意点
導 入	日本語の歴史について学ぶ。	・パワーポイントを使って、生徒にわかるように具体的に話す。資料を配布する。
展	○前編:奈良時代の音声について、「母音」「子音」	・「はひふへほ」は「パピプペポ」、「たちつと」

開 1	「特徴」について知る。	は「タティトゥテ」と発音するなど、実際に発音させる。
展 開 2	○後編：日本語の歴史を知る。 ふだん使っている文字の種類を考え、日本語に文字はなかったことなどについて学ぶ。	・「文字」は借りるものというのが常識だったことを話す。
ま と め	○日本の法律関係の文書には、漢文の訓読文が使われていたことを知り、漢文風の日本語が未だに日本語の中に残っていることを知る。	漢文の訓読文について、現在でも使われていることを知らせる。

中俣尚己先生には「日本語の歴史を知ろう！」というテーマでパワーポイントを使って、講義をしていただいた。前編は「奈良時代の日本語の音声」について学んだ。奈良時代の日本語の音声の母音や子音、音声の特徴などについて学びながら、書かれている言葉を上代の発音で読んでみようなどの体験もして、生徒たちは深く学んでいった。生徒の中には音声について興味があり、疑問点を質問するなどして自分の知識を深めていった。

後編は「日本語の文字の歴史を知ろう！」について学び、日本語に文字はなかったことなどを学び、世界で使われている文字は「2系統」しかないこと、人類の歴史上「文字」を1から作った民族はほとんどいないこと等を学んだ。また、平仮名や片仮名はなぜ難しいのか等、具体的に資料を使って理解した。また、法律の言葉、明治時代の大日本帝国憲法が漢文の書き下し文であったこと、また、刑法は1995年と、民法は2005年に平仮名になったことなどを教えていただき、公民で民法について学んでいる3年生はなるほどと納得している様子が窺えた。



A: 漢字ミュージアムにて



B: 中俣先生の授業から



C: 谷口先生の授業から

3. 大学との連携2：⑦⑧ 漢詩を作ろう

日本語の歴史について学び、明治時代までは著名な日本人も漢詩を書いていたことに触れた。生徒にとっては、漢詩というものは読むものであり、自分たちは本当に創作できるのかと思いながらも各グループで一首作る事となった。漢詩の創作については、谷口(2006)ⁱⁱⁱがあるが、今回は2018年度版の『漢詩作りテキスト』^{iv}を生徒たちに配布していただき、漢詩に使われる詩語集や平仄なども記載されていて生徒たちはこの詩語集から言葉を選び、平仄に合う漢詩を創作していった。漢詩創作については、他に漢詩実作教材「漢詩カード」試論^vなどがあり、創作するという楽しみを伝えている。

- 1 対象 2年生・3年生(各3名×4班、2名1班 計14名)
- 2 日時 10月31日(水) 漢詩・漢文について①(第1時)
11月7日(水) 漢詩・漢文について②(第2時)
5時間目 (13:40~14:30) 6時間目 (14:40~15:30)
- 3 場所 大学 教育創生リージョナルセンター機構棟 未来教室対応・高度化授業研究室
- 4 講師 本学国文学科(漢文学) 谷口 匡 ※補助に国語科の学生、大学院生等
- 5 内容 日本人も漢詩を作っていたことを知り、漢詩のきまりについて学び創作する。
- 6 指導案 第一時 漢詩の構造を知る(目標 七言絶句の構造を理解し、漢詩作りに興味をもつ。)
本時の展開

	生徒の学習活動	指導者の支援および留意点
I	<ul style="list-style-type: none"> ○李白「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」を音読する。 ○七言絶句の特徴である韻について理解する。 ○七言絶句の特徴である起承転結について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・七言絶句という詩形や主題に注目させる。 ・中国語による漢詩の朗読を聞かせ、韻の美しさに気付かせる。 ・四コマ漫画を用いて起承転結を説明する。とくに転句に注目させる。
II	<ul style="list-style-type: none"> ○日本人が作った漢詩を読む。 ○穴埋め形式によって漢詩を作ってみる。 ○平仄について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人も漢詩を作ったことに注目させる。 ・漢詩の一句が2・2・3の区切りになっていることに気付かせる。 ・漢詩の一句を用い、中国語の発音を交えて説明する。
III	<ul style="list-style-type: none"> ○「漢詩作りテキスト」をもとに漢詩の作り方を理解する。 ○漢詩のテーマと分担を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢詩作りテキストを配布し、漢詩の作り方を説明する。 ・3人1班を決めておく。 ・第一句から第四句まで、1人ずつ分担させる。授業補助者が協力する。

第2時 漢詩を作る（目標 班で一首の七言絶句を完成させ、漢詩作りの面白さを味わう。）

本時の展開

	生徒の学習活動	指導者の支援および留意点
I	<ul style="list-style-type: none"> ○推敲の故事を学ぶ。 ○作ってきた句を班で見せ合う。 ○七言絶句に完成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頭で説明する。 ・不自然な漢語の使い方には助言する。 ・起承転結にはそれほどこだわらない。
II	<ul style="list-style-type: none"> ○完成した漢詩に訓読と口語訳をつける。 ○発表できるように短冊に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然な訓読になるように助言する。
III	<ul style="list-style-type: none"> ○班ごとに漢詩を発表する。 ○感想を交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・句ごとに、作った生徒に訓読と口語訳を朗読させる。第一句の作者にはテーマについても説明させる。 ・感想を発表する時間がない場合、授業補助者が講評を行う。

創作した漢詩のテーマには「秋の月」「美少年」「故郷」等があり、各班が交流し、補助の大学院生等が講評してくれた。作品の一例としては原文「涙尽沙場寄此身 夜長漫漫倍思親 更深萤火入庭樹 寂寂惟看不见人」、書き下し文「涙尽き沙場此の身を寄す 夜長きこと漫漫倍（ます）ます親を思う 更深萤火庭樹に入る 寂寂として惟（ただ） 看れば人を見ず」、現代語訳「戦場に身を任せることで、涙も枯れ果ててしまった。夜が非常に長い、そう感じているのはますます肉親を懐かしく思うからだ。夜が更け螢が庭の木に入って来た。ひっそりとした寂しい中、螢をじっと見つめれば、人が見えないことを実感した。」を挙げる。（書き下し文一部改訂）戦場にいる兵士の寂しい夏が静かに過ぎる情景が目浮かぶようだ。

1 週間の間班で決めたテーマについて個人分担の部分について、詩語集の言葉をどれにすればよいのか試行錯誤し、漢詩の言葉と遊ぶ時を過ごした。5首とも押韻や平仄の規則にそったものが創作でき、漢詩を詠むことで漢詩がどのように言葉を大切にし、リズムを大切にし、頭を使って考え抜かれた言葉であることかを体感した。

IV. 考察

生徒たちはこれまでの授業の中で、日本語の歴史について学ぶことで、昔の日本に住んでいた人たちが、他の国の文化や文字を取り入れてうまく活用してきたことを知った。音声や文字についても、現在とは違う発音、違う文字で相手に伝えていたこともわかった。

特に、大学との連携を通して学んだ知識は生徒たちに深く残ったようであった。また、大学との連携の中で、よりわかりやすく生徒たちに適切なアドバイスがいただけたことは、生徒たちにとって励みになった。生徒は疑問に思ったことに対して中俣先生宛に以下の質問を送った。「和語についての生徒の質問です。合図、植木、胡瓜、秋刀魚は、和語のルールに反していませんか」それに対して、中俣先生は『日本国語大辞典』を調べることです。以下に私からの回答を述べます。①「合図……もとは「アヒヅ」と表記されていました。ところで、「会う」「買う」「言う」などもア行で終わっていますね。しかし、未然形を作るとどうなるでしょうか？そう、これらは「合わない」「買わない」「言わない」のようにワ行の動詞です。そして、現代ではワ行ですが、これらの語は、かつては「会ふ」「買ふ」「言ふ」のようにハ行でした。②植木……これは、もともとは「ウエキ」です。上代では「uweki」のように発音していました。」等と適切な解を生徒たちに示し、生徒たちは更に学びを深めていくことができたのである。先生からの答えを全員に返すことで、日本語についてさらに深く考えるようになった。

また、漢詩の創作については以下のような感想が書かれている。

- ・自分で漢詩を作るのは楽しい。・漢詩の仕組みを理解できた。・思っていたよりもルールが多いな。
- ・班でまた、違う漢詩がありとてもおもしろかった。・漢文がおもしろいことに気づいた。意外と考えるのがたいへんだと思ったが、漢字だけでもとても深い意味の文を伝えられるんだと感じた。

今回生徒たちは、漢詩を学ぶ際、漢詩の詩語集を用いて語を組み合わせた。この詩語集にはどの位置に持つてくることができる言葉かということが平仄も含めて書いてある。この言葉の中から、まずはストーリーを作り、一句ずつ割り当てられ、言葉を選択した。それぞれの物語のある、漢詩はとても興味深く創作できたようであった。また、漢詩に関するアンケートで漢詩が好きだと答えた生徒の中には「漢字だけで景色を伝えられるのが素敵だから」や「ルールがあり、上品な感じがする」「独特なリズムや漢字から情景を想像するのが面白い」などと答えており、漢詩に対してよい印象を持てたことがわかった。

V. おわりに

総合的な学習で「日本文化を探る一漢字・漢詩を通して考えよう」を企画したことで、生徒たちは日本語の歴史や、日本人の文化となっているものの由来、漢字や漢詩への理解を深めることができた。

国語の古典（古文・漢文）の授業となると難しく思っているようであるが、今回の総合の枠組みで授業を構成することで生徒たちの興味や関心に答える形で授業が展開されていったため、生徒たちの感想は前向きな発言が多く見られた。漢字ミュージアムなどの機関で、楽しく漢字について視覚的に学べたことも意義があった。

このように総合的な学習を国語につなげる学習とし、国語の授業だけではカバーできない問題について探究することは意義のあることではないだろうか。日々の探究の中では生徒たちは、日本漢文や杜甫や李白などの既習の漢詩以外の漢詩を調べて、漢詩について講評し、交流することで日本文化を考える機会となったと考えている。また、生徒の興味関心に沿って、漢詩の題材を幅広く求め、現代の言葉を言い表せる漢語が詩語集に入れば、もっと創作の幅が広がると考えられる。生徒たちが日本語の歴史を探ることで、漢字や漢文への抵抗感をなくすことは、今後の国語での授業の組み立て方にも大いに参考になるのではないだろうか。

i 『中学書写一・二・三年』光村図書、p 20、2018

ii 『国語六 創造』光村図書、p 168、2016

iii 谷口匡「実践研究報告 音読から創作へ 京都小学校「ランゲージ」における漢詩の授業」『新しい漢字漢文教育』42、pp 50-58、2006、

iv 谷口匡『漢詩作りテキスト』2018（当日配布テキスト）詩語集、平仄や漢詩の決まりなどが掲載されている。

v 高芝麻子「漢詩実作教材「漢詩カード」試論—中学校・高等学校での教材として」『横浜国立大学国語教育研究』No. 43、2018